

第134回 岡 山 外 科 会

日 時：平成9年10月26日(日) 10時より

場 所：倉敷ファッションセンターイベントホール

会 長：山 崎 泰 弘

(平成9年12月4日受稿)

1. 痙性斜頸に対する視床破壊術

岡山大学医学部脳神経外科 松 下 博 和 青 井 瑞 穂 富 田 享
大 本 堯 史

14例の痙性斜頸に対するVoi核を中心とした視床破壊術について、臨床成績を検討した。視床の破壊側は、異常収縮する胸鎖乳突筋の同側、板状筋をはじめとする後頸筋群の対側で、より優勢な筋で判断することとし、半数で良い成績

が得られた。破壊側の決定が困難な症例では、両側手術の必要な可能性があり、その際、試験用脳深部電極を設置し、その臨床効果に応じて治療計画を立てるのが安全かつ有用と考えられた。

2. 外転神経麻痺を呈した CCF の一例

水島中央病院 白 川 武 志 足 立 吉 陽 秋 岡 達 郎

症例は、58歳、女性。頭痛、複視にて発症。眼科にて右外転神経麻痺を指摘され、当科紹介受診時、右外転神経麻痺以外神経学的異常を認めず、眼球突出、結膜充血、雑音を認めず、入

院後、脳血管撮影で、右 CCF を認め、低流量であり、コタス手技にて症状軽快した。脳血管撮影でも CCF は消失した。診断、治療方法について文献的に検討し報告した。

3. 顔面の骨切り術について

倉敷中央病院形成外科 小 山 久 夫 太 田 正 佳 小 宗 弘 幸
西 村 雄 都 甲 武 史 勝 又 裕 子
池 田 欣 生

上顎あるいは中顔面の垂直距離が長い顎変形をまとめて長顔症群、long face syndrome と呼ぶ。我々は、long face の 1 例を経験し、上下顎

の骨切り術を同時に行うことで良好な結果を得たのでここに報告した。

4. 徒手整復不能であった上腕骨近位骨端線損傷の治療経験

岡山労災病院整形外科 高田 英一 花川 志郎 梶谷 充
 笠岡市立市民病院整形外科 駒井 康孝 庄 隆宏

症例は2例ともに Salter-Harris II型であり、初診時 X-Pにて、骨頭は内側後方へ大きく転位していた。受傷当日、徒手整復を試みるも整復不能であり、観血的整復術を施行した。上腕二頭筋長頭と前方骨膜は骨頭と遠位骨片の間に嵌

入していた。上腕骨遠位骨端線損傷は通常保存的治療を行うが、骨頭が内側後方へ大きく転位し徒手整復不能な場合、骨片間に軟部組織の嵌入していることがあり、観血的整復術を考慮する必要がある。

5. 急激に両下肢麻痺をきたした胸椎椎間板ヘルニアの1例

国立岡山病院整形外科 山内 太郎 中原進之介 末長 敢
 田中 雅人 甲斐 信生

明らかな外傷の誘因がなく急激に両下肢麻痺で発症した胸椎椎間板ヘルニアは非常にまれであり、文献的な報告も少なく、過去の文献および我々の症例から見る限りでは、急激に発症する胸椎椎間板ヘルニアは、働きざかりにある年

齢の、肉体労働者で肥満のある人に起こる傾向があると考えられた。我々の症例では急激に症状が発生した要因の一つに黄色靭帯骨化症の合併による脊柱管の狭小化が考えられた。

6. DHS 抜釘後に新たに生じた大腿骨頸部骨折

岡山市立市民病院整形外科 中島 恭哉 渡邊 唯志 小浦 宏
 白井 正明 佐藤 理

今回、我々は DHS による大腿骨転子部骨折内固定後、抜釘を施行し大腿骨頸部骨折を生じた1例を経験したので報告する。症例は70歳の女性、交通外傷にて当院救急受診となった。

右大腿骨転子部骨折を認め、DHSにて内固定

を施行、骨癒合獲得後、術後18ヵ月目に抜釘術を施行するも抜釘後15日目のX線写真で大腿骨頸部内側骨折を認めた。老人の大腿骨転子部骨折の抜釘後には、新たに骨折が生じうる可能性があると考えられた。

7. 脛骨骨幹部骨折術後骨髄炎の治療経験

岡山大学医学部整形外科 松尾 真嗣 佐藤 徹 井上 一
 岡山済生会病院整形外科 守都 義明
 光生病院整形外科 秋山 明三

【目的】脛骨骨幹部骨折術後に骨髄炎を生じた6例の治療成績を検討した。

【症例】初期固定は髓内釘のみ3例、創外固定後に髓内釘施行2例、プレート固定のみ1例であった。

【結果】起炎菌は黄ブ菌4例、緑膿菌1例あり、

このうち MRSA を2例認めた。早期抜釘を施行した3例では良好な骨癒合と骨髄炎の鎮静性を認めた。内固定材料を留置した3例中2例は骨髄炎が遷延化した。

【考察】感染を認めた場合、早期インプラントの抜去、固定法の変更が重要である。

8. 救命できた壊死性筋膜炎症例

岡山赤十字病院整形外科 土居 克三 小野 勝之 那須 正義
山根 孝志 東原 信七郎 村上 勝彦
大淵 左知子

endotoxin shock による急性腎不全を伴った左下肢壊死性筋膜炎の一症例 (34歳, 女性) を経験した。ICUにおける全身管理と早期 debridement により救命することができた。壊死性筋膜炎はその診断と治療開始が遅れると極めて予後

が悪く致命率の高い疾患である。比較的稀な疾患ではあるが壊死性筋膜炎という疾患の存在を念頭に置き診療にあたることが重要であると思われた。

9. 75歳以上高齢者大動脈弁狭窄症の外科治療の検討

心臓病センター榊原病院心臓血管外科 濱 中 莊 平 畑 隆 登 津 島 義 正
松 本 三 明 吉 鷹 秀 範 甲 斐 恭 平
袖 長 安 積 中 村 浩 己 南 一 司
榊 原 宣

【対象と方法】1989年～1997年9月までの75歳以上高齢者大動脈弁狭窄症例21例について検討を行った。

【結果】17例で機械弁, 4例で異種生体弁にて人工弁置換術を行った。術前5例で溶血性の貧血を認めた。21例中19例が重度の石灰化を伴っ

ており, 人工弁の挿入に際し, CUSA の使用, 特殊な糸かけ等を行った。全症例が軽快退院した。

【結論】75歳以上高齢者 AS に対する人工弁置換術は, 術後血行動態の改善は著明であり, 積極的に外科治療を選択すべきと考えられた。

10. 閉塞性動脈硬化症に対するカテーテルアテレクトミーの経験

国立岡山病院心臓血管外科 浅井 友浩 鈴木 栄治 藤井 隆文
徳永 宜行 藤田 邦夫 谷崎 真行

1994年11月から1997年8月までの期間に15症例21病変に対しカテーテルアテレクトミーを施行し, 11病変について遠隔期の狭窄率を調査し得た。結果, 遠隔期に9例において50%以下の狭窄率にとどまり, 2例でそれ以上の狭窄をみ

た。また, 病変の性状の違いによる再狭窄の起こりやすさについて検討した。

endovascular intervention の一方法として有用な成績であった。

11. 胸腔鏡下肺切除を施行した気管支異物の一例

岡山赤十字病院外科 藤山 敏行 森山 重治 藤田 康文
渡辺 啓太郎 池田 英二 内藤 稔
辻 尚志 古谷 四郎 名和 清人
小野 監作 大塚 康吉

症例は27歳, 男性で6歳時異物を飲み込んだ既往があるがその後異常を認めず放置していた。1997年7月より肺炎を繰り返しており, 胸部X

線にて左下肺野に浸潤影を認め, 気管支鏡検査にて左B¹⁰入口部に狭窄と結石を認めた。閉塞性肺炎を合併した気管支結石症と考え胸腔鏡下に

Lt. lower lobectomy を施行した。摘出標本では B¹⁰ a 末梢に異物が嵌頓しており気管支異物であった。

12. 胸腔鏡下に切除できた Mesothelial cyst の 1 例

岡山市立市民病院外科 河本 純一 松前 大 濱田 英明
戸田 完治

症例は、46歳女性。平成6年8月検診にて胸部X線写真上異常陰影を指摘、胸部CTにて後縦隔に腫瘍を認めた。その後、平成9年になり増大傾向を認めたため胸腔鏡下に摘出した。摘出した腫瘍は、稀な先天性嚢胞の一つである Mesothelial cyst であった。

13. 自然気胸に対しより確実に低侵襲な手術を行うための工夫

国立岡山病院呼吸器外科 小谷 一敏 東 良平 井野川 英利

自然気胸に対する胸腔鏡手術は、その疼痛の軽度なこと美容上の利点から治療の第一選択となったが、一方、術後の再発率が腋窩開胸と比較して高いことが問題となっている。そのため様々な工夫がなされてきているが、我々も少しずつ術前検査・術式に工夫を加えより確実に低侵襲な手術を行うよう努めている。現在、我々の行っている術前検査・術式を紹介する。

14. 肺気腫に対する外科治療50例の経験

岡山大学医学部第二外科 遠藤 重人 伊達 洋至 青江 基
山下 素弘 岡部 和倫 安藤 陽夫
清水 信義

目的：慢性肺気腫に対する Volume Reduction Surgery の安全性と効果を検討する。

方法：平成7年7月から平成9年8月までに当科で VRS を施行した慢性肺気腫患者50例を対象とした男46例、女4例、平均年齢64.6歳、H-J III^{*}24例、IV^{*}23例、V^{*}3例うち27例が酸素療法を必要とした。術前リハ後平均1秒量751ml、全例術前、1ヵ月以上のリハビリを行った。VRSは、胸骨正中切開にて44例、後側方開胸で2例、VATSで4例、牛心膜と自動縫合器を使用して

切除した。

結果：平均手術時間170分、平均出血量328ml、平均摘出肺重量103g。重篤な合併症、手術死亡はなく、自覚症状の改善を86%、酸素療法からの離脱を59%に認めた。術後は、FEV₁、FEV₁%、PaO₂、六分間歩行距離の増加とTLC、PaCO₂の減少を有意に認めた。

結語：VRSは、自・他覚症状、呼吸機能、動脈血ガス分析、耐運動能を、有意に改善し、死亡例はなく、安全な術式といえた。

15. 気管支嚢腫の1手術例

川崎医科大学胸部心臓血管外科 大久保 澄子 森田 一郎 稲田 洋
正木 久男 村上 泰治 田 淵 篤
石田 敦久 菊川 大樹 遠藤 浩一
山村 真弘 藤原 巍

症例は60歳、女性。主訴は動悸、嚥下障害。本年春頃より動悸出現、6月頃より嚥下障害も

認められ近医受診し、8cm大の中縦隔腫瘍を指摘され、当院紹介となる。精査の結果、気管支

嚢腫と診断し9月18日手術施行。嚢腫は周囲組織と強固に癒着しており、嚢腫液を注出した後嚢腫壁を完全に摘出した。術後経過は良好で元

気に退院した。気管支嚢腫は、稀に悪性化や再発の報告を認めるため手術時嚢腫壁の完全摘出と厳重な外来経過観察が重要である。

16. 先天性胆道閉鎖症に対する生体肝移植の経験

岡山大学医学部第一外科	八木孝仁	漆原直人	大石正博
	藤原俊哉	森雅信	津下宏
	田中紀章		
同小児科	萬木章	井上拓也	小田慈
同第一内科	東俊宏		

生後9ヶ月の胆道閉鎖症の女児に対し、父親をドナーとして生体肝移植を行い、良好な成績をおさめたので報告する。患児は出生2ヶ月より黄疸が著明で計3回の肝門部空腸吻合術（葛西手術）を受けていた。移植肝と患児の体重比の接近を計るため強制栄養下で体重が6kgに達するのをまって移植手術をおこなった。移植肝重量は250gで、理想肝重量のほぼ2倍であった。

移植肝の左肝静脈が2本である、門脈吻合に際して門脈血流が乏しく、また腹腔内の癒着が極めて強固であった。術中の腸管損傷を予測して、高位空腸を空腸瘻として腹腔外へ誘導した。めだった拒絶反応もなく、結果的に腸管損傷もなく術後62日目に空腸瘻の閉鎖を行い、経過良好にて86日目に軽快退院した。

17. 膵頭部腫瘍が疑われた膵体尾部欠損症の1例

岡山大学医学部第一外科	小田和歌子	森雅信	八木孝仁
	中川賀清	津下宏	高倉範尚
	田中紀章		

症例は75歳、女性。USにて膵腫瘍を指摘されたが膵体尾部欠損症と診断された。これは先天的な膵形成不全や膵体尾部の後天的脂肪置換を

含む概念で、本邦では120例以上の報告がある。合併症に糖尿病、先天奇形などの他、悪性腫瘍の報告があり、注意が必要である。

18. 主膵管内に発育した膵体頭部癌の1切除例

岡山大学医学部第一外科	林峰栄	高倉範尚	森雅信
	津下宏	小田和歌子	八木孝仁
	田中紀章		

膵管内発育型腫瘍は、多くの場合粘液産生腫瘍として報告されているが、中には、必ずしも大量の粘液を産生していない症例もあり、いくつかの報告もされている。

今回、我々は、77歳女性で、粘液産生がほとんど見られない膵管内発育型膵癌の1例を経験したので報告する。

19. 大腸癌重複遠隔他臓器転移の2切除例

岡山済生会総合病院外科	遠藤 彰	赤在 義浩	木村 秀幸
	筒井 信正	大原 利憲	三村 哲重
	戸田 耕太郎	岡本 康久	高畑 隆臣
	勝田 祐介	尾崎 和秀	吉井 莊哲
	渡辺 貴紀	中 圭介	広瀬 周平

我々は、大腸癌の重複遠隔他臓器転移に対して、転移臓器にかかわらず可能な限り切除する方針を取っている。これまでに6例の切除例を経験しているが、最近の2例を報告する。症例1は、膀胱浸潤と肺転移を伴うS状結腸癌の術

後22ヵ月目の脾転移再発で、脾切除後31ヵ月現在再発は無い。症例2は肝転移を伴う上行結腸癌術後10ヵ月の右上腕骨転移再発で、右骨転移巣切除後1ヵ月現在再発は無い。

20. 子宮広間膜異常裂孔ヘルニアの1例

岡山労災病院外科	浅野 博昭	大谷 裕	宮口 直之
	西 英行	福田 和馬	間野 正之
	小松原 正吉		

内ヘルニアの中でも稀な子宮広間膜異常裂孔ヘルニアの1例を経験し報告する。

患者は45歳、女性。既往歴は虫垂切除術（6歳）、出産歴4回。右子宮広間膜異常裂孔ヘルニ

アの貫通型であり、回腸末端より15cm口側が約4cmにわたり嵌頓していた。裂孔は1.5×1.0cm。手手的整復と裂孔閉鎖を行い、術後経過は良好であった。

21. 術前脾動脈塞栓術が有用であった腹腔鏡下脾臓摘出術の1例

岡山大学医学部第二外科	小林 一泰	平井 隆二	北村 泰博
	太田 徹哉	村上 正和	土井原 博義
	安藤 陽夫	清水 信義	

症例は71歳男性。ITPに対しステロイド療法を行っていたが再発を繰り返すため術前5日前にコイルによる脾動脈塞栓術を施行した後、腹腔鏡下脾臓摘出術を行った。出血量は100ml、手術時間は240分で術後血小板は35万に増加した。

術前の脾動脈塞栓術は術中大量出血を予防し、開腹への移行を少なくすることができ腹腔鏡下脾臓摘出術において有用な手技であると考えられた。

22. 術前にメッケル憩室炎と診断し、腹腔鏡下に切除しえた一例

岡山市民病院外科	松前 大	戸田 完治
----------	------	-------

症例は22歳男性、術前にテクネシウムシンチグラムなどからメッケル憩室炎と診断した。腹

腔鏡下に憩室を切除した。

23. 細径鏡を用いた腹腔鏡下虫垂切除術の1例

岡山赤十字病院外科 渡辺啓太郎 内藤 稔 藤山敏行
 藤田康文 池田英二 森山重治
 辻 尚志 古谷四郎 名和清人
 小野 監作 大塚康吉

今回我々は直径2mmの細径鏡を用いて虫垂切除を行った。患者は17歳の女性で毎年、右下腹部痛自覚し内服で軽快していた。激しい腹痛を自覚し本人の強い希望で腹腔内検索、虫垂切除術を目的として入院した。広く腹腔内を検索す

る必要性があり、腹腔鏡の使用を考え、また患者は17歳と若く、美容的な面も考慮に入れ細径鏡を選択した。

今回我々は細径鏡を用いて虫垂切除を行いその利点と欠点を経験した。

24. 建築用鉄筋棒が、臀部、腹腔内、胸腔内を貫通した一例

倉敷中央病院外科 米永吉邦 高三秀成

症例は71歳男性。作業中に足場から転落し鉄筋が左会陰部より腹腔胸腔内を通り、左肩へ貫通。精査の結果、重要臓器、大血管の損傷はないと診断し、緊急手術施行。胸腔内は舌区の一部を損傷するのみで横隔膜を穿通。腹腔内は空

腸を一ヶ所、腸管膜を二ヶ所貫通するのみだった。術後、合併症なく27日目に退院した。今回、我々は鉄筋棒が左会陰部から腹腔胸腔内を通り左肩へ貫通した患者を救命し得た一例を経験した。

25. Gastrointestinal stromal tumor の臨床病理学的検討

川崎医科大学消化器外科 佐藤元紀 忠岡好之 木元正利
 山本 裕 青木真一 林 次郎
 山村真弘 久保添忠彦 小沼英史
 川島邦裕 川崎誠治 岩本末治
 今井博之 山本康久 角田 司

胃及び小腸の Gastrointestinal Stromal Tumor (消化管に発生する間葉系腫瘍のうち、平滑筋腫や神経鞘腫など分化が明確なものを除いた、由来が明らかでない heterogenous な腫瘍群) の4例を経験し、臨床病理学的に検討したので、報告した。

腹腔内腫瘍で胃・腸管に関係する腫瘍では本疾患を念頭に置いて診断治療にあたり、特に5-6cmを越える腫瘍は悪性化を疑い十分な術前検査が必要で、治療は外科的摘出が一番よい。確定診断にはCD34の免疫染色が有用である。

26. 当科で最近経験した十二指腸平滑筋肉腫

岡山大学医学部第一外科 寺石文則 松原長秀 岩垣博巳
 日傳晶夫 林 峰栄 森 雅信
 高倉範尚 田中紀章

十二指腸に発生する平滑筋肉腫は比較的まれな疾患であり、その診断は困難であるといわれている。今回我々は、外科的に切除した症例を

2例経験したので報告する。1例は心窩部痛とタール便を主訴として発見された平滑筋肉腫に対し膵頭十二指腸切除及び肝部分切除、横行結

腸部分切除を行った。もう1例は、再発した平滑筋肉腫に対し臍頭十二指腸切除を施行した。

27. 大腸上皮性悪性腫瘍を合併した von Reckling hausen 病の3例

津山中央病院外科	佐藤直広	向井晃太	徳田直彦
	中村聡子	抗ノ瀬昌彦	多胡卓治
	林同輔	宮島孝直	黒瀬通弘

von Reckling hausen 病（以下R病）は神経肉腫などの非上皮性悪性腫瘍との合併が多く報告されている。今回われわれはR病に大腸癌の合併2例、直腸カルチノイドの合併1例を経験した。R病自身の予後は比較的良好とされるが

他疾患との合併が予後を左右する大きな因子となる為、非上皮性悪性腫瘍だけでなく通常の消化器癌も念頭におき早期発見の為の注意深い観察が必要である。

28. 進行性直腸癌術後12年目にイレウスにて発症した傍ストーマヘルニアの1例

岡山労災病院外科	大谷裕	浅野博昭	宮口直之
	西英行	福田和馬	間野正之
	小松原正吉		

症例は60歳の女性。48歳時に直腸切断術、人工肛門増設術を受けている。平成9年7月上旬ごろより腹満感を自覚、7月中旬になって症状が増悪し、救急外来受診し入院となった。来院時腸音は亢進、左下腹部人工肛門周囲が膨隆を

認め、臨床症状及び画像検査より傍ストーマヘルニアと診断しヘルニア根治術を施行した。傍ストーマヘルニアについて若干の文献的考察を加えて報告する。

29. 腹部大動脈瘤術後に発生した大量腸管壊死に対する Anitiperistaltic Transverse Colostomy

岡山大学医学部第一外科	藤原俊哉	八木孝仁	漆原直人
	田中紀章		
福山第一病院外科	中川浩一		
福山市民病院	貞森裕		

我々は、腹部大動脈瘤術後に多臓器壊死を来した症例を経験したので報告する。本症例は72歳の男性で動脈瘤切除、再建後、全回腸、上行結腸、下行結腸とS状結腸が壊死をきたし、左腎の梗塞を伴っていた。空腸瘻と横行結腸瘻を施行した。2ヵ月後再建術施行、技術的問題に

より逆蠕動性横行結腸瘻の造設を行ったが、術後1ヵ月でTPNからの離脱と腸肝循環の改善がもたらされ、短腸症候群の発現を効果的に抑制することができた。短腸症候群の非移植的な外科的治療として期待されたので報告した。

30. 遺糞症をきたした小児巨大結腸症の2例

岡山大学医学部第一外科 漆原直人 中川賀清 八木孝仁
猶本良夫 田中紀章

便秘が誘因となり糞便が不随意に排泄され下着を汚す遺糞症は患児・家族にとって深刻な問題である。本症の原因には心因性、便秘を原因とした overflow incontinence やヒルシュスプルング病などの器質的病変にとまなうものがあ

る。今回、われわれは直腸内に多量の便塊が貯留し巨大結腸症を呈した年長児遺糞症の2例(ヒルシュスプルング病・慢性便秘が原因の特発性遺糞症)を経験したので問題点を含め報告する。

31. 肛門疾患患者の術前内視鏡検査の評価

チクバ外科・胃腸科・肛門科病院 鳴村廣視 竹馬浩 瀧上隆夫
根津真司 竹馬彰 仲本雅子

年間約1,400例の肛門手術を行っている我々の病院では、肛門疾患患者の大腸疾患の見落としをさけるため、術前に簡易大腸内視鏡検査を行っている。1992年4月から1997年3月までの5年間に4,916例施行、このうち27例(0.55%)に

大腸癌が認められ、全体としての有所見率は12.1%であった。肛門手術時の術前検査は大腸疾患発見の契機として重要であり、積極的に大腸内視鏡検査をすることが望ましい。

32. 一般外科病棟における病名告知の現状と患者 QOL の評価

岡山大学医学部第一外科 石井龍宏 斎藤信也 岩垣博巳
猶本良夫 津下宏 田中紀章

informed consent の参考にするため、入院患者309人を対象に、病名告知と QOL に対するアンケート調査を施行した。その結果、悪性でも余命が短くても告知を望む、家族が反対しても

真実を望む患者が多数を占めた。また女性、若年群良性疾患で QOL の精神面でうつ傾向が見られ、積極的に告知を望む患者の方が良好な QOL を保っている可能性が示唆された。